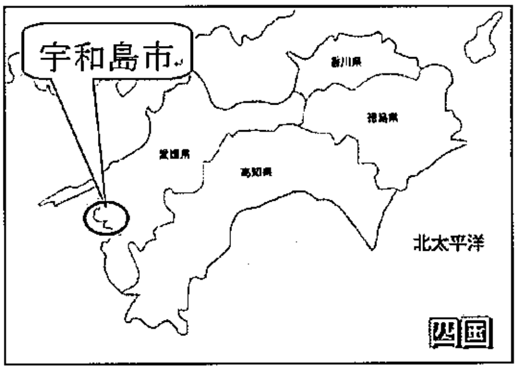
—愛媛県—

# 育ちざかり、遊子
## —元気な子供たちの将来に向けて—
## 「遊子の台所プロジェクト」

遊子漁業協同組合女性部
山　内　　満　子

## 1. 地域の概要




私たちの地域「遊子」（ゆす）は、愛媛県南部の中心地・宇和島市にあり、豊後水道の「宇和海」に面した、三浦半島の北部に位置している。宇和海沿岸はリアス式海岸であり、集落の背後には、30度を超える急傾斜地が迫り、「耕して天に至る」と言われる段々畑が地域の風景を形作っている。また、その風景は、国の「重要文化的景観」に選定されると共に海は、リアス式の入江が連なり、海面養殖業が盛んな地域である。

## 2. 漁業の概要

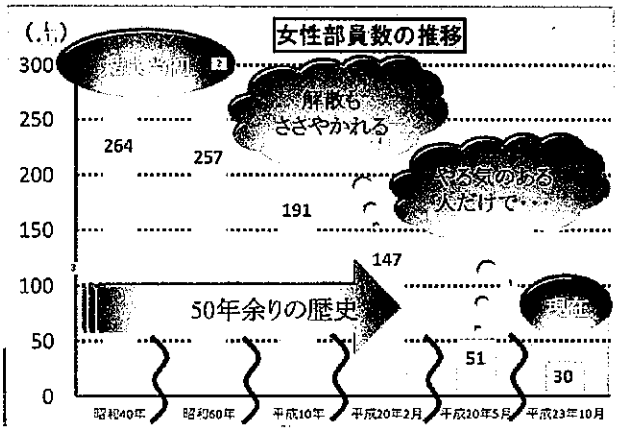
遊子漁業協同組合は、イワシ網漁が盛んであったが、昭和35年イワシ網漁の崩壊に伴い、組合も時を同じくして倒産に追い込まれた。その後、真珠貝・真珠・魚類の養殖業への転換を進め、現在に至っている。全国有数の漁業生産量を誇る宇和島地域であるが、中でも、当地区は、養殖漁業が最も盛んな地域である。

近年の厳しい漁業情勢の中で、毎年のように漁業者が廃業を余儀なくされる状況となり、現在の組合員数は239名で、平成22年度の養殖物の生産量は、6,352トン、金額で、47億5,600万円となっている。

## 3. 研究グループの組織と運営

遊子漁業協同組合女性部は、昭和30年3月に発足し、漁業再建への取り組みを進めると共に、昭和45年度に海を美しくする運動を開始、昭和50年度には合成洗剤追放運動を展開した。更に、昭和53年度合成洗剤の追放運動の一環として石けんと合成洗剤の配達交換を地区全戸対象に実施し、回収合成洗剤964個、配置石けん1,694個の実績

を基にＪＡとの共同石けん配置運動に発展させ現在も続いている。その他、健康を守る運動・魚食普及活動等にも積極的に取り組んできた。




しかし、長引く不況の中で部員数も減少し、一時解散もささやかれたが、50 年余りの間先輩たちが築きあげてきた女性部の歴史をここで終わらせてはいけないと全体会や組合との協議を重ねる中で、やる気のある者だけで続けようと言うことになり、平成20年5月に新生女性部として再スタートを切った。

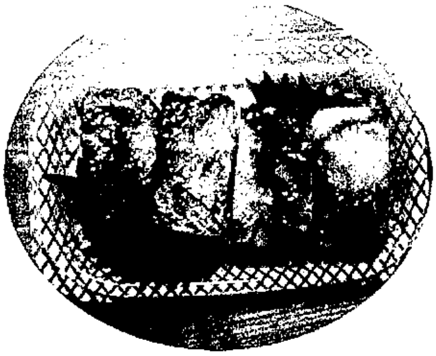
再スタートにあたり、組織改編と規約の大幅改正などを行い、現在 30 名の部員で活動を続けている。その全員が「食品開発部会」、「石けん部会」、「海藻部会」、「真珠加工部会」の４つの部会に参画できる体制を整備し取り組んでいる。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

新生女性部のスタート当初は、従来の活動もなかなかうまく実施できない状況が続いたが、宝であるこの海を、地域を、子供たちにいつまでも残せるよう頑張らなければならないとの想いが日に日に強くなり、「海を守る活動」や「魚食普及活動」等、基本の活動は地元小学校等で今まで通り続けた。その活動の中で、新生女性部として今、何をやるべきかと考えた時、ありきたりだが遊子で獲れる魚介類を利用して加工品が作れないか。それによって少しでも地域活性化につなげることはできないかと考える中で、立ち上がったのが、「食品開発部会」である。遊子の郷土料理や、特産物を利用した加工品を開発し、その商品を、様々なイベントや学園祭等に出向き、試作販売を２年余り続けた。しかし、販売行脚の中で、愛媛県外はもとより県内でも「遊子」という地域の知名度が低いことに驚き、商品開発や販売も大切だが、地域を知っていただくことがスタートだと実感した。また、様々なイベントへ出向く中、会場の条件に合わせ、毎回たくさんの重い道具を持ち運ぶことが負担であり、省力化できないか悩んでいた。その頃、「漁村女性起業家育成支援事業 起業化セミナー」の受講をきっかけに、私たちの悩みを解決する方策を関係者で検討し始めた。これが、「遊子の台所プロジェクト」の始まりである。

5. 研究・実践活動状況及び成果

（1） 地域特産物を利用した加工活動



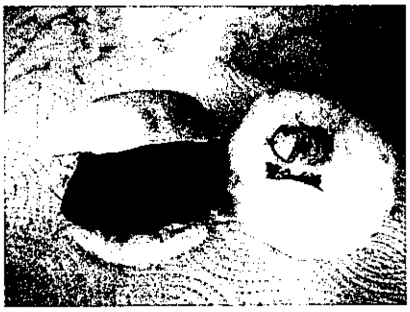
平成 20 年 5 月の再スタート当初は、3 名の食品開発部会と運営委員で試作を繰り返し、その年の 10 月に販売のチャンスがおとずれた。心配しながら臨んだが、完売で勢いがつき、その後も声がかかるがまま近隣のイベントや出張販売に参加し、愛媛・宇和島・遊子のＰＲを続けて来た。お客様はどんな商品を望んでいるのかを知ろうと試行錯誤、もがきながら取り組むも、反省の日々だった。その結果、自然と残っていったものが「照りてり寿司」なるブリ照り焼きの押し寿司と「鯛釜めし」の主力 2 品目だった。

実演販売を続ける中、メンバーから常温保存商品（レトルト商品）を切望する声が聞こえ始めるようになり、平成 21 年度、22 年度の 2 年間にわたり、県の補助金を活用して開発することとなり、その結果、第一弾として「鯛釜めしの素」、第二弾として「粗挽き鯛さつま」を開発した。このことにより、家業に従事している間にも地元のお土産売り場や市内「道の駅」での販売を伸ばせるようになったと同時に、平成 22 年 8 月から仕掛けた「愛媛のうた」のｗｅｂ販売でも少しずつ売れ始めた。このことにより、全国のお客様に「遊子」を知っていただける環境が少しずつ整う中、現在、食品開発部会の人数は 12 名と増加し、他の部会でも独自に商品開発に取り組む体制ができてきた。

石けん部会は「ＥＭ石けん」、「ＥＭ粉石けん」、海藻部会は、「遊子産ひじき」、「ひじきのおかず味噌」、「ひじきのカップケーキ」、真珠加工部会は、将来の消費者である子供たちを対象に「真珠の体験教室」（モールを使った手芸）や「アクセサリー販売」と遊子のＰＲ活動に取り組み、ようやく 4 年目にして、メンバーの想いが形になりはじめた。

(2) 遊子の台所プロジェクト

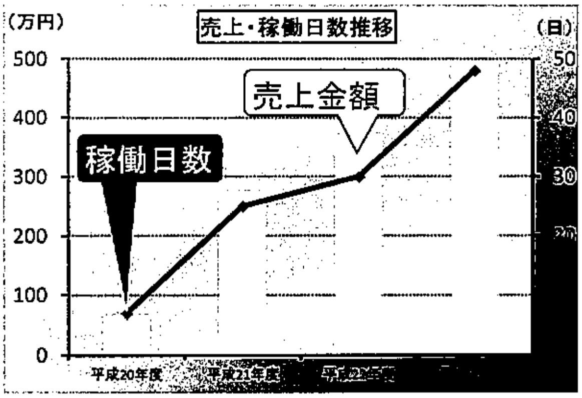
遊子の台所プロジェクトは、産地から直接消費地に出向き、対面販売をすることにより消費者の嗜好や動向の把握、養殖魚のイメージアップ等を行うと共に、「遊子ブランド」のＰＲのため、加熱調理器具や冷凍冷蔵庫等を装備した移動販売車（キッチンカー）を配備し、県内はもとより県外のイベントや収容施設等も視野に入れ販売活動をＰＲするプロジェクトだ。「子供たち」のため、「遊子の将来」のため、「生き残り」のため、「遊子ブランドの確立」のため、とみんなの想いを詰め込んだ取り組みである。



車を走らせるにあたり、今までの商品ではない、新たな商品開発に取り組むこととなった。とは言うものの、新しい商品の開発は容易ではなく、部員の中からもあきらめの声すら聞こえてきたが、苦しいことばかりではなく、作業中の楽しいおしゃべりは、厨房の外まで響き渡るにぎやかさで、それがストレス発散となり、明日へとつながり、そのおしゃべりの中から誕生したのが「たべ鯛」だった。「鯛の形をした鯛飯があったらおもしろいね・・・」から開発が進み、商品化にこぎつけた。鯛でとった出汁と調味料で炊き上げた鯛めしの中に、鯛焼きの「あんこ」のように鯛の焼き身を入れて、専用鯛焼き器で焼き上げる。シンプルなだけに微妙なレシピ開発には、道後ふなやの和食料理長さんに監修していただき、試行錯誤の結果、発表3日前に完成し商標登録も実現した。更にもう１品「たべ鯛バーガー」は、愛媛女子短期大学の学生さんが魚食普及活動の一環で考案した「鯛バーガー」をアレンジしたもので、新鮮な鯛の切り身を竜田揚げにして和風ダレにくぐらせ、玄米入りの白いパンにキャベツと一緒に挟んだものである。

新商品開発。原材料の選択。ネーミング。生産体制の整備。また、車や機材の調達に至っては県内外へ依頼するなど皆で様々な知恵を出し合い、県や漁協のアドバイスも参考にしながら進めていった。このように遊子のブランディングの取り組みが始まり、約1年間の期間を経て、新商品2つと共に平成22年11月26日に県庁で、移動販売車（キッチンカー）のお披露目へとこぎつけた。この日から、愛媛県宇和島市遊子の「場所」と「地名」を知っていただくための宣伝部隊である私たちは、走り出した。

(3) 販売活動実績




再スタート当初からの売上げは、少しずつだが伸びている。キッチンカーを配備したからといって売上げ倍増とはいかないし、鮮魚の売上げからすれば、わずかな収入だが「お客様に買っていただく」という基本を教わった。また、マーケティングの大切さも痛感した。それまでの私たち養殖漁業者の顧客は、ほとんどが仲買人であった。しかし、この活動により、消費者の顔を見て、声を聞くことができるようになり、「売る」ではなく、「買っていただく」という謙虚な気持ちになったことで、見えてきたことも多く、商品に対する愛情と工夫をありったけ注ぎ、安売りではなく労働価値に見合った価格で買っていただく。そのための努力を惜しんではならないことも活動から学習できた。

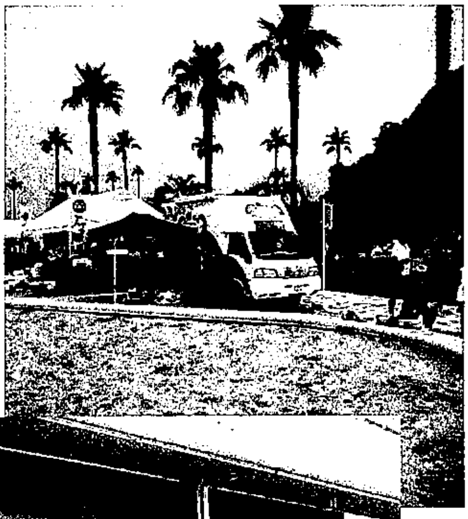
(4) 遊子の台所プロジェクトとデザイン

将来的に「遊子」という地名のとおり、浜辺で遊ぶ子供たちの笑顔と活気あふれる遊子を再生することが目標であり、子供たちに宝の海を引き継ぐという私たちの想いを車にデザインしていただいた。一番注目してほしいところが、車の両サイドに描かれた子供たちのシルエットだ。部員の子供たちがモデルとなってデザインされている。車全体に描かれた海や魚も走っているだけで宣伝になる。更に、販促グッズとしての包装資材やポスター、ユニフォームに至るまで一体感を出すと共に、この新しいデザインを今まで開発してきた商品にも取り入れ、パッケージの見直しを行った。また、このデザインを全ての商品に反映させることで、4部会が開発した商品が一つになり、別々のデザインでは実現できなかったＰＲが、統一デザインにすることで効果を上げると共に、デザインの重要性を改めて認識できた。

6. 波及効果

一度は解散もささやかれた女性部だったが、「やる気」と少しの「背伸び」、そして何より「家族の理解」があれば存続できることが証明できたと共に、この活動は、自主的な女性部活動の中で少しだけ賃金を発生させたことで、子育てをし、家業を手伝いなが

ら、わずかでも収入を得ることができるようになった。それに伴い、少しずつではあるが、若い女性たちが賛同して新入部員となっていることが力強い。また、部員の中から新たな活動の提案や新商品のアイデアが自然に出てくるようになってきた。これからの活動の新しい展開に取り入れていくつもりだ。平均年齢 45 歳。27 歳から 60 歳までの部員の想いが一つになって地域の活性化につながる効果が得られている。

7. 今後の課題や計画と問題点

まだまだ駆け出したばかりの私たちは、育ちざかり。問題は山積みだが、夢と希望をもった活動を続けている。現在は、漁協からの活動助成金により運営し、地域活性化と外向けの宣伝中心の活動に留まっているが、将来的には、長い歴史のある「海を守る活動」や「魚食普及活動」を基盤に、地域の社会貢献事業を中心として発展させ、遊子独自の展開をして行きたいと思っている。最後に、この私たちの活動は、行政や専門家の方々のアドバイスのおかげでスタートできたことを、この場をお借りしてお礼を言わせていただきたい。これらの女性部活動を続けることにより、微力ながらも衰退する漁業の活性化につながっていくと信じている。近い将来、遊子に若者が戻り、子供たちの笑顔と笑い声の響き渡る光景を、叶えられる夢として楽しく活動に取り組み、キッチンカーを走らせながら地域の幸せを願っている。